文化かごしま

第 123号
令和４年 ３月25日

鹿児島県文化協会
発行人　原口　　泉
鹿児島市山下町５−３
宝山ホール(県文化センター)内
TEL　099-223-3123

出水市ツル博物館クレインパークいずみ

目　次

『文化かごしま』第 123 号巻頭言
（県文化協会会長　原口　泉）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

特別寄稿「新世紀の鹿児島文化に期待します」・・・・・・・・・・・ 3
（県文化協会顧問　二見　剛史）
「令和三年度を振り返って」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（県文化協会副会長兼事務局長　川原　純子）

「奄美文化フェスタに向けて」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
（県文化協会事業部長　髙風　正治）

連載【この人に訊く】ＶＯＬ２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
「伝統を守り育てて、壊して、創って」
薩摩焼作家　西郷隆文さん

燃え続ける文化の灯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
指宿市文化協会　日置市文化協会　伊佐市文化協会
さつま町文化協会　霧島市文化協会　鹿屋市文化協会
鹿児島市芸術文化協会　湧水町文化協会
西之表市文化協会　中種子町文化協会　天秤宮Ⅱ

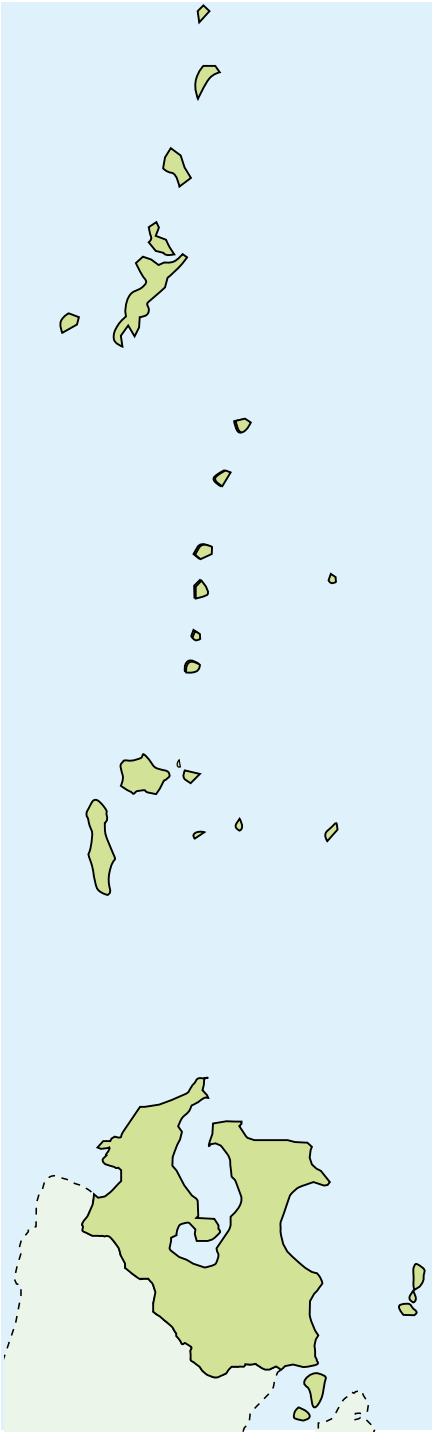
鼎談【世界に誇る鹿児島の食文化　其の弐】・・・・・・・・・・・・ 22
「ポテンシャルは無限大 !!　鹿児島の食の魅力を語る」

伝統文化の保存・継承に係る助成事業・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

市町村文化協会・加盟文化団体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

賛助会員紹介と募集案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35



～鹿児島から、酒と食の喜びを～
株式会社 本坊商店
〒892-0836　鹿児島市錦江町8番56号
TEL(099)223-6223・FAX(099)227-2919

『文化かごしま』第123号巻頭言

鹿児島県文化協会会長　原口　泉

明治初年、廃仏棄釈と「古器旧物保存方」太政官布告（一八七一年）がありました。この全く正反対のことに鹿児島の人が関わっています。今の時代を象徴するものに「断捨離」ブームがあります。明治維新は「御一新」の掛け声のもと徹底的に旧物が破壊されました。古いものは新しい世を作るのに邪魔になると考えた大山綱良県令は旧薩摩藩の役所の文書を焼き尽くしました。対照的に藩費留学生を率いた町田久成は古器旧物の保存に努め、上野の国立博物館を作り初代館長になりました。

今は誰しも地球の環境破壊が進み資源に限界があると認識していますから、ＳＤＧ’ｓ（持続可能な開発目標）が人類の目標になりました。歴史研究には古文書が欠かせません。昔を振り返って未来を見る歴史学はもともと持続可能な開発をめざす学問だと思います。

さて貴方の家のファミリーヒストリーは作れますか？ご家族の写真は残っていますか？お墓や家系図は？断捨離されていませんよね!!

二〇二二年一月に『写真アルバム　北薩の昭和』が刊行されました。あの日、あの時、思い出の数々がいっぱいです。沢山の方が貴重な写真を提供してくださいました。ありがとうございます。昭和時代にお祭りや伝統行事がどんなに盛んだったかがよく分かります。

昨年十一月にＮＨＫファミリーヒストリーでタレントの薬丸裕英さん（ご尊父が大崎町）が出演されました。ディレクターの寺田剛さんが語ってくださいました。「ファミリーヒストリーをやっていると、貴重なお写真を既に処分してしまっている方々にたくさん出会います。実は薬丸家もそうでした。裕英さんの祖父・正徳氏はカメラが趣味で沢山の写真を残していたそうです。ところが数年前にほとんど処分してしまったそうです。『まさかファミリーヒストリーの取材が来るなんて・・・』ずっと後悔されていました。明治・大正以前の史跡や資料は当然のこと、昭和の古い家族写真にも、資料的価値があります。背景に写っている看板一枚が、ファクトとしての歴史になるからです。ありのままを映すぶんだけ、写真はなによりも強いファクトです。高齢社会、核家族化、都市集中、要因は様々ありますが、どうか皆さんには家々に残る貴重なお写真を処分してしまわないようにお願いしたいものです。」体験に基づく貴重なコメントに同感です。

指定文化財のほかにたくさんの文化財が身の回りにあります。鹿児島県文化財保護審議会では文化財保護活用大綱を策定しました。とくに学芸員など地域の専門の人材育成を重視しています。また各地方の無形民俗文化財を登録文化財とすることも検討中です。指定文化財の他にも貴重な無形民俗文化財が身の回りにはたくさんあります。文化協会はほうっておくと消えていく文化財の活用保存に貢献することを活動方針の一つにしています。

新世紀の鹿児島文化に期待します

県文化協会顧問　二見　剛史

昭和五十五年春、母校（加治木）の同期生たちが原宿に集い、壮行会を開いてくれました。「故郷で働けるンダネ」「新たなる門出を祝おう」「Uターンを機に初心にかえり頑張れ」「鹿児島の庶民教育も掘り起こしてネ」等、メッセージを頂いておりました。

この度、寄稿依頼が舞い込みハッとしました。広報の林部長は『モシターンきりしま』の同人、賢治再来を思わせるような作品を皆さん楽しみにしておられます。県の機関紙は早くも一二三号、一昔前、私たちが役員の頃を思い出してほしいとの要望でした。あの頃は、県外視察情報も掲載したつもりですが、皆さんの気持ちを紹介できていたのかなあと反省しています。今、私たちの地元では『モシターン』という情報誌を発行、毎月手許に置いて、広く地域文化の総合的発展を図っています。

私は県文協の設立二五周年記念式で四蔵会長から大変心の込った感謝状を拝領しました。記念の時計を机の前に置き、今も静かに鹿児島文化の〝原点〟や〝哲学〟を考え続けております。県文協のことは一日も忘れたことはございません。

嘗（かつ）て林憲太郎氏（副会長）の呼びかけで広域交流を実践して『姶良の文化』記念誌も二回発行済み、ぜひご覧ください。

旧国分市では奄美地域と子ども同士の作品交換を永年実行しておられました。そのせいか、私たちは奄美の有志と同じ姿勢で県全体を見つめあうことができます。山根会長の鞄持ちで県内各地域の巡回も良き思い出です。会長職は全文団連（全日本文化団体連合会）の副を兼任しておりましたから、全国的催しにも出席できました。各界の有志とは今も賀状等のやりとりを致します。先般の国民文化祭誘致には県議の方々の協力がございました。県民挙げて本会を盛り上げて下さったと感謝しております。

〝多彩に築きましょう〟新世紀の鹿児島文化!!

令和三年度を振り返って

県文化協会副会長兼事務局長　川原純子

令和四年は昨年以上にコロナ感染拡大の中でのまくあけとなりました。

ここ二年間にわたり様々な行動が制限され、感染者数に一喜一憂しています。先の見えない状況の中で、文化活動のあり方や発表の仕方にも変化を強いられ、多くの行事が中止を余儀なくされてきました。

「せっかくここまで準備してきたのに心がお折れそうです」とか、一方で「運よく一月ずらして文化祭が開催でき、皆で大喜びしました」と、嬉しそうに連絡を下さった会長さんもいらっしゃいました。

開催を予定にしていた「県民文化フェスタin奄美二〇二一」も令和四年度へ延期となり、昨年十月末に副会長二人で開催へ向けての意見交換に行って参りました。「大和」と「琉球」の影響を受けながらも、独自の文化を発展させて来た奄美は、昨年の七月に世界自然遺産に登録されました。会議の後に案内された居酒屋では、島料理をつつきながらどこから誰からということもなく、三線片手に島唄が始まりました。こんな風に人々の心がつながっていく「奄美ならでは」のどことなく懐かしい温かさに包まれ、こういう歴史や環境や暮らしの中から多様な文化が生まれることを実感する思いでした

コロナ禍のため、予定していた実行委員会の立上げも、一か月先送りして開催されることが決まりました。今後も奄美文化協会連絡協議会の皆様としっかり連絡を取り合って進めていこうと思っております。

今回、県文化協会主催として初めて開催する文化フェスタでもあります。奄美の郷土芸能や伝統芸能が一度に鑑賞できる絶好の機会にワクワクしております。是非多くの皆様に足を運んでいただきたいと思っております。

さて、令和三年度も終盤を迎え「総務部」「事業部」「広報部」三つの部会では年度はじめに掲げた活動目標を集約する時期に入っております。一年間取り組んできた事が三月の三役会で報告されます。ひきつづき理事会で承認され、六月初旬に開催予定の、令和四年度通常総会に於いてそれぞれの部会より報告されることになっております。

私共県文化協会には、各市町村の文化協会と各種の文化団体を併せて、現在九十の団体が加盟する県内唯一の文化団体組織であります。発足以来五十周年あまりを迎え、歴史を積み重ねてきた多くの各市町村文化協会や、全国でも貴重な地域定着の活動を続け、来年五十周年記念公演が予定されている鹿児島オペラ協会など、各種文化団体に於いても外にもたくさんの誇るべき団体が活躍されております。何といっても誇れるのは、お宝ザクザク・人材の宝庫だという事です。これらを生かし、未来へ向けた文化協会像のグランドデザインを作成するプロジェクトも動き始めております。

これからも鹿児島県の豊かな自然や歴史風土の中で培われた伝統文化を守りながら、お互いの交流を深め合い会員の皆様と共に心豊かで文化的な環境の中で喜びを見出していけるような活動や若い世代へ文化をつないでいく活動に取り組んでいきたいと思います。

コロナと県民文化フェスタ

鹿児島県文化協会事業部長　髙風勝治

県民文化フェスタの開催に当たり、各市町村文化協会や各種文化団体の皆様・役員の皆様のご協力に感謝申し上げます。

ただ、残念なことに、今、世の中全体が新型コロナに振り回されています。私たち鹿児島県文化協会もご多分に漏れず同様でございます。二〇二〇年度に予定していた「県民文化フェスタｉｎ　いさ」と「県民文化フェスタｉｎ　かごしま」～和の響きと舞～も中止せざるを得ませんでした。

明けて二〇二一年度十月三十日（土）に予定していた「県民文化フェスタｉｎ　あまみ」は会場の奄美文化センターが、十月三十一日までコロナワクチンの接種会場になったため、中止せざるを得なくなってしまいました。このため二〇二一年度も開催は困難となり、県民文化フェスタは二年連続での中止となりました。

そこで、二〇二二年度は、思いを新たに当初十一月三日に計画していましたが、大島郡内の各町村の諸般の事情でこれも変更せざるを得なくなり、令和四年十月十六日（日）に落ち着きました。ただ、今の所この日も町民体育大会と行事が重なり出演が危ぶまれる町村もあります。

今年に入り、奄美でのフェスタへ向けた実行委員会を開催しようとした所、コロナのまん延化のため開催地から会場等の準備ができないと連絡を受け二度にわたり中止せざるを得ませんでした。しかし、このままでは準備が遅れてしまいますので、実行委員会立ち上げのための会は書面での表決とすることにし、現在に至っております。

今後、実施に当たって様々な課題が出てくることが考えられますが、会員相互の知恵と工夫で乗り切りたいと考えております。皆様のご協力をよろしくお願いします。

日高千代子バレエスタジオ

バレエを通して素敵な人間創りを目指します。

本部・串木野、伊敷ニュータウン、川内セントピア、
出水横尾自治教室　TEL0996-32-8476

HP：http://sky.geocities.jp/hidaka819/ballet/

「この人に訊く」VOL.2

「伝統を守り育てて、壊して、創って」

薩摩焼作家　西郷隆文（さいごうたかふみ）さん

Q まず『薩摩焼』の歴史を教えてください。

A：『薩摩焼』は、島津義弘公が朝鮮に行って朝鮮の陶工を連れてきて、その陶工に習うということからスタートすると思います。

ただ、それ以前にも、何ていうのかな。土、粘土で作って焼いたものはあるんです。焼き締めのね。そこに釉薬、長石釉のガラスを土の表面につける技術を朝鮮から持ってきたみたいです。それがスタートかな。ただ、『薩摩焼』っていう言い方の始まりは、薩摩と佐賀鍋島と徳川幕府が出品したパリ万博からだと思っています。「この焼き物は何だ」って言われて「薩摩藩の焼き物だ」と言ったんじゃないかな。確証は無いけどね。

Q 西郷さんが焼き物の仕事に入るいきさつを話してください。

A：焼き物を始めたのは、二五歳からかな。大学を出てから三年間はアパレルメーカーにいました。新しい糸を生産して加工して製品を作って売るという過程の研究です。例えばウールの水着は我々が最初に作ったんですよ。でも使えなかった。飛び込むと脱げるんです、伸び縮みがないから。だからモデルは秋川リサさんだったかな、ホテルのプールサイドで座っているだけの写真だったわけ。でも、次の年にはスパンデックスっていう伸び縮みする素材をちゃんと開発して実際に使える水着ができるんです。レナウンだったかな、アーノルドパーマーのワンポイントが付いたシリーズにも関わっていました。結構面白い仕事をしていましたよ。当時は、青・赤・黄・グリーンとか、今で言えば蛍光色ですよ。そういうサイケデリックな布地を東南アジアに輸出すればバンバン売れました。でも、もうすぐオイルショックって時代でもありましたね。

その頃、上野の美術館に連れて行かれたんです。「日展」で、長太郎先生の作品を見てびっくりした。黒薩摩の作家だから、黒い花瓶や茶碗だろうなと思っていて、でも、会場は彫刻に色を付けたよ

うな作品だらけ。「どこにあるんですか」って聞くと「これ、全部焼き物だよ」って言うわけ。全部焼き物だったんですよ。もうびっくり、目からウロコでしたね。例えば高木道子さんだったかな。古い聖書が砂漠の上で開いていて、文字も書かれていて、聖書の表紙がボロボロ散っていて・・・、これも焼き物ですよ。ウワーっと思いました。「へー、こんなの作る人がいるんだ」と。

あの頃、粘土の紙みたいな素材があって、折り鶴を作って焼くと焼き物の折り鶴ができるんです。骨壷なんかも風呂敷で包んで結んであるわけ。よくよく見ると焼き物。少年マガジンとかジャンプとか漫画の本が並べてあるけど、それも焼き物。表紙絵から全部、写真でも貼ってあるんじゃないかと思うぐらい。「これは面白い」って言ったら、先生が、「お前も、ぼちぼち帰って来たらどうだ。こっちを手伝え」って言うんです。自分も「こんなの作れたらいいな」と思いました。今までは材料が糸で、それでも、今までに無いものを作ってきたわけだから、糸が粘土に変わるぐらいどうってこと無いや、うん、作れるんじゃないかと思いましたね。

帰って来て、まず何をしたかって言うと、粘土作り。当時、粘土は窯元で作っていましたからね。成形や釉薬の方はなんとかできそうだけど、粘土と窯焚きは独学ではできない。だから「先生、粘土の作業場に入れて」って一番に頼んだわけです。

Q 轆轤（ろくろ）を回すイメージが強いですけど。

A：泥にまみれていたんですよ。例えば抹茶碗の土も「細かいの」「粗いの」って先生が指示して煎茶や玉露の茶器を作るわけです。粘土を作る側は、もう大変です。山から土を掘ってきて、水とかき混ぜて泥水を作って、網を通して粘土が沈殿した後、上で浮遊しているのを掬うんです。ちょっとずつ蓄積して、やっと玉露に使う粘土ができる。

先代からのお弟子さんがうるさくて、「細かければ細かいほどいい」と。もう一切、なんにも混ざり気のない粘土を作るわけです。専用の網があって、まず一センチ四方に六〇個の目を通す。一番粗い粘土です。次に八〇番、一〇〇番を通す。さらに二〇〇番の網と、どんどん細かくする。タンクの一番左の二五〇番が最高に細かい。そういう粘土を作っていく。そうじゃないと職人さん達の要望に応えられないので、一生懸命に粘土作りを覚えましたね。

Q 日置の周辺で、西郷さんがしっくりきたって感じる粘土が取れたのですか。

A：昔から日置はミカンを作ってきた。ミカンが盛んな所はいい土があるんです。日当たりとか水はけとか、条件があるでしょ。その基本が頭にあってミカンをやめた畑を探して「ちょっと掘らしてください」って試験をしたら、きめの細かい粘土が取れる。「うん。よい土だ」と。それから日置瓦ね。昔から変わらず田んぼの底を掘るんですよ。沈殿して何年もたつ粒子が細かいやつね。凄く粘着性がある。それを山の土と田んぼの土と適度にブレンドすると、轆轤でヒューっと回るいい粘土ができるわけです。

Q なるほど。

薩摩陶胎抹茶盌

Ⓐ：窯焚きは、窯詰めからやってきました。初代からいる前田さん、トシちゃんって先生も呼んでましたけど、ああいう人はもう全然違う。「とっちん」っていう受け皿を、ここに置いてこの空間をこう広げてと、普通入らないような所に二つも三つも置く。いつも工夫している。それを見て学んでいくんです。

でも、窯の焚き方と火を止めるタイミングは難しい。とにかく、先生が「もうよし」と言ったときにピタッと止めるわけです。タイミングは「色見」っていうのを窯に入れて、窯の温度が一二〇〇度を超えたら先生に持っていく。「まだまだ」って言われる。温度を少し上げて、少しずつまた上げて持っていく。「まだよね」って言われる。だから「色見」を自分用と先生用と二つずつ入れといて、どのタイミングで止めるのか変化を見ながら、先生が「よしっ」というタイミングを勉強しないといけない。火を止めるって、成功か失敗かの見極めだから。少し温度が上がり気味だとか、ちょっと風が吹いてるとかで、いつも微妙にタイミングが違う。

Ⓠ粘土作りの修行と窯焚きの修行は並行してやられていたのですか。

Ⓐ：ずっと並行でやっていました。窯詰めは、いつもトシちゃんと二人です。ただ、薬掛けとか釉薬の方は、トシちゃんの奥さんがしていましたね。だから、そっち方面はタッチしなかったです。

Ⓠそこは分業なんですか。

Ⓐ：はい。だからうちの窯も、弟が名古屋の研究所に行って釉薬を勉強したから、全部弟に任せて私は一切タッチしないんです。任せるところは任せて、一切口出しをしない。そんな感じでやっています。

Ⓠ東京から鹿児島に帰った頃の暮らしぶりはどうだったんですか。

Ⓐ：弟子入りだから給料は無いわけですよ。サラリーマンの頃は給料が、三万・次は六万・次の年には一二万って頃。嘘みたいな時代でしたよ。でも、帰って来たとき、手取りが三万円あったかなあ。

Ⓠ向こうの「初任給」に戻ったのですね。

Ⓐ：結婚していましたからね。谷山の児玉病院の児玉利武先生の家の前に一軒家があって、家賃一万円。でも、生活できなくて、谷山駅を出てすぐ左側の川沿いに家が並んでいて、そこの牛小屋か馬小屋だったかな、その二階を月に六千円で借りました。でも、風呂がないから駅前の銭湯に行くしかない。子どもがいたから「お風呂が必要だよね」って。次の子が産まれた頃、武岡に市営住宅ができて半年くらいいました。その後、日置に家を借りた。家賃が千円。三〇歳頃だったかな。

Ⓠ安い。お風呂は付いていたんですか。

Ⓐ：五右衛門風呂がありました。でも、表に八畳間が二つ。六畳の玄関の間があって、奥に六畳が四つ並んでて、部屋の中にブラン

コを作ってましたよ。でかい家でした。(笑)そこで毎日、粘土を作って、器を成形して、窯は灯油で焚いていました。

Q 陶芸家たちの協同組合を作られるんですよね。

A：作品を展覧会に出品していたのですが、三〇代は入選だけで、四〇歳ぐらいから賞をもらった作品が売れ始めたりしたんですよ。この作品が二〇万、この作品は三〇万、少し暮らしが楽になってきた。

ぱっと振り返ると、焼き物を作っている連中がいっぱいいるわけです。だから「一緒にやろうよ」と誘ったのですが、あの頃の若い連中は、自由を求めて自分の好きなように作っていくのが主だった。グループを組んでやるのは嫌いっていう一匹狼が結構いました。でもね、やっぱり結婚するじゃないですか。子どもが生まれると、逆に「売り先を紹介してくれ」とやって来るわけです。「分かった」って、五人ぐらいになったのかな。南薩線の日吉駅跡を刈払い機で綺麗にして、一緒に作品を売ったりしたんですよ。「民陶祭」として五年程売っていました。

でも、これじゃ埒(らち)があかないと発展的解散をし、一五名を目標にして「陶遊社」を立ち上げました。すぐに目標達成しましたよ。で、「ちょっと面白い事できるよね」って、山形屋さんに事業計画を持って行ったんです。担当者に受け取って頂いて「よし」と思った。だけど、一年も二年も音沙汰がない。聞きに行っても「いや、上がなかなかうんて言わなくて」と、全然話が前に進まないんですよ。

そしたら人事異動で、隈元さんという担当者に代わっていましたので、「どうなってるんですか」と聞きに行きました。そしたら、「私は計画書を見ていないので、もう一回計画書出してください。私は山形屋の異端児だから、言いたい放題バンバン言いますよ」って言ってくれたんです。

自分で異端児と言うのだったらひょっとするかもって思ってたら、「面白いじゃないですかそりゃ。」「企画書を書いてくださいよ、僕が言いに行くから」って、課長・部長・統括部長に直接話をしてくれました。統括部長も「おお、面白いかも。で、どこでやるのよ」「やっぱ、催事場でしょ」「催事場、山形屋で一番売れるとこだぞ、売り切れるのか」「部長や統括は超えたんだから、後は役員がうんって言ってくれれば」と言うわけ。で、私なんかも一緒にお願いに行きました。「西郷さん、もし売れなかったらどうするの」って役員が聞くから、「売れなくても、鹿児島県の薩摩焼の若手陶芸家を育成するために山形屋が協力して展示販売をするって言えばいいじゃないですか」って言ったわけ。鹿児島の山形屋が率先して若い陶芸家を育てているんだと。大義名分が立つじゃないですか。

あの時の山形屋さんの決断は、本当に薩摩焼を救いましたね。県内の若手陶芸家に大きな道筋を作って頂きました。「本当に焼物だけでこんなイベントが出来るの?」「どんな仕掛けをしたんですか?」と、福岡・佐賀のデパートのバイヤーさんから質問攻めに会いましたが、「それはもう、山形屋さんの計画したイベントですので・・・」

県も『薩摩焼』の事は心配してくれていて、「薩摩焼フェスタ」というイベントを考えているという相談で、県も支援するという約束をしてくれたわけです。我々陶遊社グループ二五軒、美山グループ一三軒、鹿児島市内が一〇軒、あと県内の陶芸家に連絡して、全部で六五軒ほどの窯元が集まって「薩摩焼フェスタ」がスタートしました。その第三回から私が会長に推され、第三〇回まで務めました。

一九九八年でしたかね。「薩摩焼四〇〇年」の記念フェスタの頃。県の事業支援があと二・三年で終わりになるという事で、一五名いた委員に「どうする」って相談しました。翌年「だったら組合を作ったらどうだ」という流れで、その一五名が発起人なって組合ができたわけです。山形屋さんでの陶遊社グループ展も組合が引き継いで、色々なイベント名になりながら、今も続いていますよ。

Q「陶遊社」の方々も、自立できたわけですね。

A：そうだね、うん。「薩摩焼フェスタ」は良かったですよ。一人で一〇〇万円売るのがざらにいましたからね。白薩摩なんか、何百万も売った人もいました。白薩摩はそれまで売る場所が無かったんだけど、フェスタをしたらすごく売れた。白薩摩は単価が高いからね。白薩摩の方々は喜んでくれました。

それから、私の友人に東京で裏千家のお茶をやっている先生がいてね。「今度『薩摩焼』ってテーマでお茶の発表会をするけど、どっかいい窯ないかなあ」って電話があったんです。「ちょうど良かった。『薩摩焼フェスタ』っていう、六〇から七〇の窯元が集まって、販売もありますから来てください」って伝えました。そしたら団体で、弟子さんを大勢連れて来たんですね。その人たちが買う、買う。ウワーって。自分用とか、孫弟子もいっぱいいるわけですもん。値段の高いやつなんかも全部売れたわけです。みんな喜んでいましたよ。私なんかも、県展で知事賞を貰ったのが売れました。だからやっぱり、なんて言えばいいかな。最初の頃はそういう組合が無いから、あれだけ一同に集まれるっていうのは出来なくてね。

Q自分たちだけという取り組みから広がった感じですね。面と言うか、塊としての広がりと言うか。

A：そうですね。きっかけになったわけです。そのうち組合には奄美の陶芸家や種子島・屋久島からも参加するようになりました。

Q県全体を見渡すような立場で、将来を期待している窯とかあったりするのですか。

A：そういう所はですね、何て言うのだろう、作家になるんですね。『薩摩焼』が国指定伝統工芸になるとき、色々な約束事やルールを提出するわけですよ。国にですね。例えば白薩摩には細かいヒビ「貫入」がありますね。この「貫入」がないと『薩摩焼』とは呼ばない。でも、作家の中には「貫入は必要ないんじゃないの」って人もいます。その代わりに、白薩摩は名乗れない。

今取り組んでいる「漆」や「シラスバルーン」もそうです。漆は、本当は古い薩摩焼でやっていますけど、でも『薩摩焼』とは自分でも絶対に呼ばない。あくまで作家西郷隆文の個人の作品として売る。西郷コレクションで売る。だから「西郷企画」って会社を作ったん

です。

でも、会社を作ったおかげで自分の発想がどんどん新しい方向にいってますね。昔の時代の織部とか侍達が愛した焼き物が、どこかひねくれていたりして、面白い・可愛いって思う。それで今、ちょっと研究してますね。シラスバルーンを入れた粘土は轆轤が引けないんですよ。だから、形を作って削り出しをしていく。形はごったましいんだけど焼くと軽くなる。シラスバルーン（ＣＢ）の特徴です。

薩摩ＣＢ黒楽茶盌「薩摩」

Q 県工業試験場が開発したシラスバルーンは、他分野にも良い素材になるかも知れませんね。

A：可能性がありますね。だって、タイルが水に浮く時代ですもん。軽いから良い建築素材になると思います。壁に使う光触媒と組み合わせたらいいでしょうね。ビルは洗うのが大変。鹿児島なんか特に火山灰が降りますから、そんなタイルができたらいいですよね。

シラスバルーン（ＣＢ）は彫刻にもいいと思いますよ。軽いから自由にできる。私は何て言うか、遮光器土偶だったかな。宇宙人のような顔の大きな目をした縄文土器。ああいうのを作ってみようかなあと思っています。

Q 締めに、今後の展望をお願いします。

A：私ね、日本から海外に持っていって売るよりも、日本に買いに来て頂きたい。「おいで」って言えば、来てくれるじゃないですか。そういう拠点を作れないかなと思います。パリの市場とかドイツのマイセンとかみたいな大きな見本市を日本にも作って、世界中から人がやって来るようにしたいですね。

それとね、伝統工芸っていうのはある意味壊していくものだとも思っていますね。改革をして新しいものが生まれて、それが次の伝統になるかも知れないじゃないかって。だから、伝統は伝統で守る人がいて、改革する人はどんどんやればいいと思うんです。でもね、それを伝統工芸の名前を使ってと言うのはちょっとまずいんじゃないかというのもあるのです。『薩摩焼』は、やっぱり伝統の世界。守るべきものがありますからね。

例えば『川辺仏壇』ってあるでしょう。そこに伝統産業を守るということで、国から二〇〇〇万のお金が下ります。国が出す。このお金で何か作りなさいと。でも、その代わり仏壇を作っちゃいけないという制限が一緒に付いてくる。「仏壇屋さんが、何で仏壇作っちゃいけないの」って思いますよね。答えは「仏壇が売れないんだから、これからは仏壇ではなくて仏壇作りの技術で何か新しい売れるモノを作りなさい」と言うわけです。仏壇しか作ったことがない連中に「何か新しいモノ」って難しいじゃないですか。すると、「こちらからデザイナーを派遣しますから」と言ってくる。デザイナーが何か「変なの」をデザインして作らせるわけです。で、デパートとかに飾る。新しい製品だって持ち回るわけです。そうやって予算の二〇〇〇万は、ほとんどデザイナーが持っていくわけ。仏壇組合

には金が下りない。いったい何のための予算なのって思う。

Q 何かの「力」が働いているんですかね、

A：おかしいよね。私なら仏壇作りの人たちにお金が届くようにする。工芸っていうのは、いろんな人たちが大勢関わって成り立っているんです。関連する部品工場がいっぱいみたいなイメージね。だから、ある工場がつぶれると全部の工程が立ち行かなくなる。伝統産業そのものが無くなってしまう。だから、誰かが美味しい所だけかっさらっていくんじゃなくて、現場で頑張っている人たちが正当に評価されて正当に食っていける、仕事を続けていける。そういう仕組みを作る目線が必要だと思います。まあ、それが協会や組合作りに繋がっていたわけなんですけどね。

過去の権威や誰か有名な人の名に寄りかかるんじゃなくて、今、ちゃんとここにあって続いているものを、ちゃんと評価して生かさない限り無意味ですよね。

特に、今は「弟子をとる」とか「弟子を育てる」とか難しい時代ですから、国が金を出すのなら、修行中の若者の生活を支えるようにすればいいんじゃないかと思いますよ。月一〇万もあればずいぶん助かる。芸術とか文化とか、とにかく時間をかけて身に付いていくものだから、その時間をどう支えてあげるかというのが大きな課題でしょうね。

西郷隆文さんは、日置市に「日置南洲窯」を開き、薩摩焼協同組合の理事長として「薩摩焼フェスタ」を長年にわたって開催するなど、『薩摩焼』の振興発展に尽力してこられました。西郷菊次郎さんの孫（西郷隆盛さんと愛加那さんの曾孫）にあたります。

愛情・親切・信頼のまごころ介護・看護
社会福祉法人 恵会
特別養護老人ホーム
はっぴー園
鹿児島市下福元町9563番地　電話(代)099-262-3700

医療法人 まこと会　小児科・内科
はっぴー・クリニック
理事長　松村　武久
院長・小児科医 有馬　純久
内科医 福留　由子　内科医 徳留　京子
※健康診断・乳幼児健診・各種予防接種受け付けます。
鹿児島市坂之上4丁目5番3号
TEL　099-284-6550　FAX　099-284-6551

指宿市文化協会

倍返ししても足りない親の恩　角園五雄

真実は人目に触れず葬られ　下山索陽

マイカーで来てマシーンで歩いている　宮田律子

下戸一合夢は天下を駆け巡る　桜井しげのり

肩を貸し母の歩幅で墓参り　稲田切株

ジイ様は孫に遊ばれ御満悦　篠原郁代

二人して加齢トラブルかばいあい　上村ひさしげ

本気度は奈辺にありや拉致問題　北薗正和

楽しみの予定コロナに奪われる　西山哲郎

ぬるま湯を保つ暮らしが難しい　中村正二

日置市文化協会

日置市文化協会連絡協議会では、日置市の文芸を盛んにしようというねらいから毎年児童生徒・一般市民から文芸作品を募集し、優れた作品をひおき文芸賞として表彰し、今年度は十一月二十八日に表彰式を実施しました。入賞作品は次のとおりです。（児童生徒の部は省略）

「ひおき文芸賞」入選作品

随筆

【最優秀賞】

「歩く」…そして「走る」　若宮　耕三

詩

【最優秀賞】

朝霧　十羅（とおら）

俳句

【最優秀賞】

秋天へ杉門は児等迎へ立ち　福元さゆり

【優秀賞】

南薩線茂りの抱く枕木よ　小野裕喜

茅葺に並ぶ串柿日差し呼び　野上政人

短歌

【最優秀賞】

洋上に島影三つつながれて
甑大橋の落日まぶし　坂口勝美

【優秀賞】

仕送りを局に受取る母につき
ひたに歩きしあの草いきれ　宮野栄子

マグロ船の別れに背の乳飲み児は
愛らしく笑みてパパ送り出す　坂口和世

川柳

【最優秀賞】

残り物レシピ検索新メニュー　岡田ゆかり

【優秀賞】

慣れないよマスク忘れて後戻り　中園照志

さつま狂句

【最優秀賞】

駅伝の優勝（ゆうしょう）で日置（ひお）き笑（わ）れが舞（も）っ　中園照志

【優秀賞】

郷中（ごじゅ）ん寄会（よ）い四民憲章（けんしょ）で締めくくっ　池上良子

コロナ禍で延期（の）べた五輪も沢山金（どさつきん）　東中清隆

伊佐市文化協会

二年ぶりの文化祭開催

伊佐市文化協会では、コロナウイルス感染対策のため、加入団体の活動の制限や、文化祭等の発表機会も得られないなど、活動停滞で会員減少も進み、協会運営が難しい状況でした。

その中で、何とか市民の文化活動の活性化を図ろうと、感染症が減少した昨年十二月五日(日)に、二年ぶりの文化祭を伊佐市文化会館で開催しました。

当日は、感染症予防のため、全入場者の手指消毒と体温測定、さらに会場の換気や出演者控室での消毒など、徹底したウイルス対策を取り実施しました。

舞台二八団体、展示五団体が発表。舞台部門では吹奏楽・日舞・太鼓・民謡・カラオケ・レクダンス・フラメンコ・フラダンス等、展示部門では生け花・書道・絵画・写真など、幼児から九〇歳代の高齢者まで日頃の研鑽の成果を披露し、来場した数百人の市民に、上質な文化芸術を堪能していただきました。

また、発表機会を得た会員の活動意欲向上にも繋がりました。

コロナ禍を乗り越え、明るさを求め みんなで探そう、活動の道を！さつまの文化

令和二年十一月、文化協会員の代表者が集い「活動報告会・交流会」を行いコロナ禍の非常に厳しい中で、各団体がどの様な考えで活動しているか報告し合いました。

その中で、それぞれの団体が厳しさに負けず、前向きで、お互いを支え合いながら、励ます姿は、素晴らしい明るさと強さを感じました。

色々と協議を重ねる中で、厳しいコロナ禍でも出来る活動として、写真・絵画・俳句・陶芸等の「展示会」の提案があり、みんなの賛同を得ました。

こうして、十三団体が参加した「展示会」は、令和三年四月二三日から三〇日までの八日間開催し、町民一〇二名が見学に来場し、安堵を得たのです。その後、踊りのグループが自分達だけで発表会を開催しました。

文化活動は、「同じ趣味を持った人同士」の集団です。お互いが話合い、希望を持ち、健康で、元気で頑張りましょう。

もうすぐ春です。あの美しい、綺麗な桜並木があちこちで見られます。さつま町には桜の名所が多数ありますので、ぜひおいで下さい。お待ちしております。

さつま町文化協会

霧島市文化協会の活動

霧島市文化協会　会長　瀬戸口　浩

霧島市文化協会は現在七支部一四〇団体、二二〇〇名で活動しており、例年各支部ごとの展示発表、舞台発表、そして年一回の芸術祭を開催しています。

今年はコロナ禍の影響も有りましたが、こういう社会状況だからこそ、文化の役割は大きいと考え、会員一同知恵を搾り、工夫をし、活発な活動を行っています。

その中の一つに「芸術祭、展示発表」があります。今年は十一月二七日から十二月三日まで開催しました。様々な作品が会場一杯に展示され、鑑賞者から「元気を戴きました」等の賞賛の声が挙がっていました。

また、文化活動を活発にするためには、様々な方々のお力添えが必要なことから、「議員と語ろかい」を定期的に開催し、文化活動の現状を知っていただくと共に、文化活動の課題等についても意見交換を行っています。今年も七月二九日に開催しました。

その他、「文化講演会」を八月二九日に、元県観光プロデューサーの奈良迫秀光氏を講師に招き、「文化」と「観光」の連携についてご講演いただきました。

霧島市文化協会は、「文化は、人生を豊かにし、感動する心や、何か新しいものを生み出そうという力を与えてくれ、そういった心や力が、社会や経済を元気にしてくれる」という信念のもと、これからも活発に活動して参ります。

十年ぶりの舞踊公演　多くの方々の協力を頂き公演

鹿屋市文化協会　三鐘流家元　三鐘　凜

当初の予定から一年遅れになりましたが、令和三年十二月十二日鹿屋市文化会館で十年ぶりの舞踊公演を開催する事が出来ました。

コロナ禍の中、出演者の中に医療関係者もいて、稽古も思うように出来ず開催を危ぶんだ時もありましたが、出演者全員と、「大丈夫、絶対出来る」と、信じていました。

当日は、七百名を超えるお客様に足を運んで頂きました。

御祝儀舞「寿・松竹梅」から、フィナーレ迄、三十曲を披露して大きな拍手を頂きました。

感染対策を行いながらの公演でしたので、鹿屋市文化会館始め多くの方々に助けて頂き、皆様の心の温かさ優しさに感激致しました。

私達は、踊る事でお客様に喜んで頂いております。踊れる事に感謝し、皆様に感動して貰える様に、これからも精進して参ります。

薩摩郷句

鹿屋市文化協会　渋柿会鹿屋支部

きかん太郎うっ置っきたが後が不安　西浦大器（第記）

墓ん水沢山蚊をば住まわせっ　永田紀子

運の良事ち好っなあん娘が側べ座っ　倉美和子

年の暮れ母んミシンな一晩中　太田太陽（陽子）

赤け顔で卒業はせんち焼酎瓶ぬ抱っ　中野検索（健作）

年の暮れ三密っ避っ歳暮選っ　福島篤丸（篤紀）

冷て朝指先だけで洗るた顔　安楽雪ん子（友起子）

周囲かあ責め立てられっ役く負るっ　福園放電（力）

新米親幼児が喋ったち凄え騒動　故　中村白浪（辰郎）

「第47回鹿児島市春の新人賞 決定」

鹿児島市芸術文化協会

鹿児島市春の新人賞は、文化芸術の将来を担う人材の育成と鹿児島市における文化芸術活動の向上発展を目的とし、本市を中心に優れた芸術活動を行っている若い芸術家を顕彰し今後の活躍を期待して贈られるもので、受賞者総数は今回の三名を含め一八三名となりました。

昨年九月三十日の締切りまでに過去最多の二五名の応募があり、第一次・第二次選考を経て十二月一日に、大塚智恵（おおつかちえさん・ピアノ）、篠崎理一郎（しのざきりいちろうさん・イラストレーション）、花柳二仁祇（はなやぎににぎさん・日本舞踊）の三氏に決定しました。

二月二日には鹿児島市役所にて表彰状が授与されました。当初はサンエールかごしま講堂で表彰式を開催予定でしたが、新型コロナウイルス拡大のためやむなく中止となりました。

三名の受賞者が今回の受賞を機に、ますます鹿児島や世界で羽ばたいてくださることを願い、県民の皆様と共に応援したいと思います。

花柳　二仁祇

篠崎　理一郎

大塚　智恵

大隅やまなみ俳句会

鹿屋市文化協会

蠟梅にマスク外して近づけり　和田　洋文
羽ばたきの軽き蝶ゐて冬日和　中原　律子
火の山は眠り地底の夢を見る　池江　和
ひまわりも軍艦島も立枯るる　有薗　すみえ
月天心冴え渡りたる寒の寂　安庭　幸
初夢や枕の中にそのままに　川崎　健一
動くもの見えて春待つ池ほとり　加藤　エミ子
春を待つ古刹の池の和らぎぬ　福沢　霧子
花八手神の洞へと向いて咲き　永吉　朝子
大きな手ひろげて盛れり花八手　永吉　一歩

私たち大隅やまなみ俳句会は、（湾俳句会主宰の）和田洋文先生ご指導のもと、毎月第四日曜を中心に吟行・句会を実施しています。

俳句に興味のある方、お待ちしています。

町民を元気づける「芸術文化作品展」

湧水町文化協会

コロナ禍により、湧水町においても活動拠点となる公共施設等が度々臨時休館となり、思うように文化活動を営むことができないのが現状です。活動の成果を発表しあう町秋まつり文化祭をはじめ、本協会主催の舞台芸能祭など秋のイベントもことごとく中止となりました。

寂しい思いが続く中、本町では文化活動の意欲低下とならないように今年度も「芸術文化作品展」をいきいきセンター町民ホールで開催していただきました。

一二月前半には創造性に満ち、個性豊かな町内の園児・児童・生徒の作品、後半は芸術性に富んだ文化団体・福祉団体の作品が数多く展示されました。本年度は、園・学校での作品づくりに取り組む子どもたちの真剣な表情や学校行事での生き生きとした姿の写真が会場でスクリーン放映され、コロナ禍でなかなか見ることのできない子どもたちの頑張る様子を見ながら作品が鑑賞できるという一工夫された作品展で、多くの方が元気づけられました。

「五百年以上続く『大的始式』」

西之表市文化協会

今年も一月一一日の夕刻、西之表市の栖林神社弓場に於いて「大的始式」が行われました。大的始式は五〇〇年以上も続く島の伝統行事で、その年の悪鬼災難等を祓い清め、島内の平安、無病息災を祈願するもので、県の指定文化財になっています。赤々と燃える松明の焔を囲むようにして、境内には陣幕が張り巡らされ、その中を古式床しき烏帽子に袴姿の射手が六人、一人三番六射を大の字をゆっくり描くようにして行い、計三六本の矢で遠くの直径約一・七五mの大的を射る。しかし、最後の一本は「満つれば欠ける」の戒めにより故意に的を外す。大的始めの夜風に吹かれれば病気をしないと言われ、コロナ感染予防対策をしっかりとりつつ、寒風の中今年も多くの方が観覧に訪れました。わが島は老齢化に人口減少も進んでいますが、「大的始式」これからも守っていくべく島の伝統文化であります。

「寒風の中、的に向かい射る」

「射手と子ども」

中種子町軽音楽同好会「テイストオブハニー」

中種子町文化協会

皆さんこんにちは。

私たちは週一～二回、二〇代から七〇代まで一七名で練習している軽音楽同好会です。

五月には敬老会で演歌、七月には夏祭りで歌謡曲、十一月の文化祭ではジャズ、十二月のクリスマス会では子どもたちの好きなアニメなど、その時々に応じた曲を何でも演奏しています。

その中でも私たちが一番楽しみにしているイベントが、鹿児島アミュプラザである「熊毛地区まるごと物産展」での演奏です。

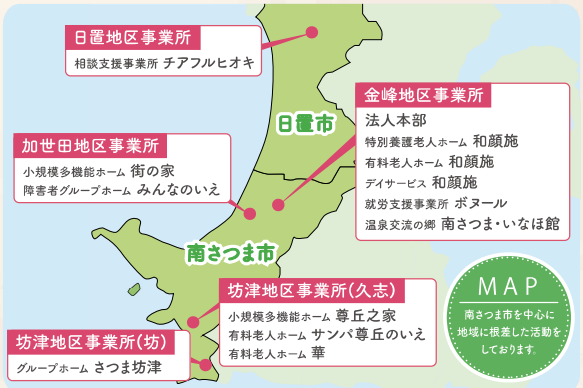
種子島の特産品を紹介しながら、地元を飛び出しての演奏は、とても緊張しつつ、楽しい舞台でした。

と、様々なイベントで一年中忙しくしていたのもコロナ禍以前の話で、最近はお声をかけていただいても、イベント自体の中止が多くなってきました。それでもコロナ禍明けを楽しみに、また多くの皆さんと音楽で心を通い合わせたいと思っています。

社会福祉法人博楽福祉會は
"地域に溶け込み、地域に役立ち、
地域社会から愛され信頼される"
事業所作りを目指しています

お気軽にご相談ください。
博楽福祉會総合相談窓口 ☎ 099-273-8080

HAKURAKU FUKUSHI KAI
社会福祉法人博楽福祉會
〒899-3516 鹿児島県南さつま市金峰町浦之名1430番地
TEL：(0993)77-2611　FAX：(0993)77-2251



— 医療法人 隆成会 —

RYUSEIKAI HOSPITAL

隆成会病院

理事長 院長　阿久根 哲

•内科　•消化器内科　•循環器内科　•内視鏡内科　•リハビリテーション科
•人間ドック　•職場健診　•特定健診　•長寿健診　•療養病棟入院施設

鹿児島市郡元2丁目11-20（イオン鴨池店西側）　TEL(099)257-1411（代）

天秤宮Ⅱ

かたつむり

宮内　洋子

冬きたりなば
巌のかべを　降りていく

湯気のかたまる　ぬくもりの辺(べ)に

湯の熱気に　殻は　ぶるぶる
触手は　さまよい　はじめる

湯気のおもては　地獄の面(おも)

角を　半分に　ちぢめて
へばりつく　からだ

全身を　巌に　吸いついては
離す　もだえる

からだ　半身　あたたまり
頭上の大木から
緑風を　いただく

ゆっくり方向転換をして
湯表から　のがれようとする

巌のかべを　直角に曲がり
湯と平行に
果てのない　ノロノロ　紀行

どんぐりが　一個　落ちてきた

チャッ　ポーン

湯の音を　聴く

黄槿(はまぼう)は　ハート型の葉を　一枚
落として

みいつけた

崎田　きよ子

本当は何も見ていなかったのだ
ただそこを通り過ぎていただけの私

なんにも心に留(と)まらないまま

季節は何度も繰り返され
そして五度目の春が来た

広い病院の駐車場
見て　見て　私たちを見て
ざわざわと小さな囁きが　呟きが
風に乗り　ここからも　あそこからも
降り注ぐ光を浴びて
歌い舞う一面の赤い花たち
聞こえなかった声が届き
見えなかった色が目の前で揺れている
こんなに大勢で　毎年　まいとし
力の限り命を燃やして咲いてたんだね

聞こえたよ　見ているよ　今たしかに
春になったね　ありがとう

【世界に誇る鹿児島の食文化　其の弐】

ポテンシャルは無限大!!
鹿児島の食の魅力を語る

今回は、リモートによる鼎談となりました（原口泉先生舞舞スタジオにて）

文中の略称、原口（原）　中原（中）　小園（小）

原　今回の鼎談のゲストは、枕崎市と南大隅町からお招きしました。中原晋司さんと小園絢子さん。お二人のチャレンジを少し伺って、頼もしく思いました。鹿児島も変わらなきゃなあと強く感じました。

私も二〇歳前後の学生と一緒に日本史を学んでおります。鹿児島の歴史を学んでいると、昔の薩摩藩のドル箱の一つが鰹節（屋久節）だと番付表に出ています。それから亜熱帯性の果樹を佐多薬園で育てています。どちらも、今に繋がる歴史かなあと思います。

何と言っても鰹節は食品の王様です。和食が世界遺産になって嬉しいでした。二〇一五年ミラノ万博のテーマは食でしたので私は「霧島の食と文化」と題して講演しました。一八五一年にロンドンで第一回が始まって以来、万博は優れた工業製品を自慢し合う催しでしたから、ずいぶん様変わりしたなあと思いました。

薩摩藩は水産加工品を中国へ輸出しました。昆布がその代表です。「俵物」と呼ばれた干しアワビ・干しナマコ・フカヒレなどです。昆布からグルタミン酸、鰹節からイノシン酸、椎茸からグアニル酸、旨み成分ですね。昆布のグルタミン酸を明らかにしたのが池田菊苗さん。東大の教授でした。お父さんは薩摩藩の本草学者池田春苗。菊苗さんは京都の薩摩藩邸で生まれているんです。

昔は、体が弱ったときは茶節を重宝したんです。味噌と鰹節に熱い茶をかけた茶節の味の良さは何にも替えられない。茶節は災害の時にも絶対いいですよ。茶節はすぐできる。水と熱源があればいい。カップ麺とかは炭水化物でタンパク質が足りない。この問題が指摘されて「なるほどな」と、「だったら鰹節だよなあ」と茶節のことを思ったんです。それに、

お出汁というのが、旨味・風味・香り、それから鰹節を削っている音も含めて、私は究極の食の王様だと思っているんです。

枕崎市は良い取り組みをしていますね。鰹節の生産量が日本一ですからね。「枕崎カツオマイスター検定」で鰹節に対する認識を広げて、試験や公式テキスト作りまでやっていて、新しい食の震源地として枕崎に注目しています。それに太平洋戦争のさなか黒豚を守り、文明開化の象徴となった銀座の豚肉料理を始めて「鹿籠豚」というブランドが生まれました。鹿籠(かご)は、枕崎の古い名前です。枕崎ではケージ飼いをしないで大事に育ててきた。最近、豚の心臓や腎臓を人間に移植していますね。超機能性、驚きです。今や鰹節や豚がいいことは科学的に証明されている。しかし、この世界的な商品の普及にネックとなっている部分もある。その壁をぶち破ろうとしているのが中原さんだと思います。今、取り組んでいらっしゃることを教えてください。

中　茶節をアピールして頂きありがとうございます。中原水産の中原晋司です。私は枕崎市の水産会社の三代目です。鰹節を一生懸命に作ってきた会社です。初代がいわゆる魚屋で、魚を売ったり、鰹節やサバ節を作ったり、さつま揚げをやったり、アイスキャンディーを売ったりしていました。地元のニーズに応えるような取り組みって言うか、イノベーティブな事業ですね。ただ、いくら鰹節を消費者の利便性や好みに合わせようと頑張っても、本当に狙うアプローチができていない現状をもどかしく感じていました。

JR指宿枕崎線での「出汁パフォーマンス」

そういうこともあって、鰹節の知識や出汁の引き方の教室をやっています。今までで二五〇〇人位に伝えています。コロナの前までは外国人も多くて、うち一〇〇〇人位が外国人っていうことで、世界中の人達が出汁に注目していることを感じています。

原　僕が驚いたことがあって、「くさや」を作っている所がありませんか、枕崎に。これ、八丈島だけだと思っていました。

中　今は無いですね。でも「くさや」の原料のムロアジを日本で一番水揚げするのが枕崎です。「くさや」を作っているのは、伊豆とか新島とか八丈島とかですが、枕崎でとれたムロアジをそこに供給するっていう関係になっています。

原　八丈島で芋焼酎が作られているのをご存知でしょうか。八丈島というと江戸時代、流人の島です。幕末、密貿易の罪で八丈島に流された丹宗庄右衛門という阿久根の商人がいるんですよ。その頃八丈島では貴重な米で酒を作っていましたから「芋で作りなさい」って、芋焼酎の作り方を島の人達に教えたんです。今でも八丈島で芋焼酎を作っていて、れっきとした醪取り焼酎です。その銘柄が何と「島流し」です。食には話題性も必要ですね。

今のお話でね、出汁の教室の半分近くが外国人だということは、これからの和食のマーケットは海外にあると思いませんか。

中　そう思います。今、鰹節などの加工品を六ヶ国に輸出しています。台湾・香港・シンガポール・アラブ首長国連邦・アメリカ・フランスです。けれども、まだ黎明期と言いますか、うどんとか和食の出汁として鰹節を使っているのが主流なんです。本当はその国の料理に鰹節を活かしてほしい。そうなったら第二の段階かなと思います。

原　鰹節に国境は無いですね。まず、鰹節工場で働く人達にベトナムやフィリピンの女性の割合が増えてますでしょう。こんな身近なところで東南アジアの世界と繋がっている。ただ、今は非常に気を使ってらっしゃると思います。外国人労働者に対する思いやりということね。これが非常に大事であるという認識です。こういうことは、やっぱりわたし達も知っておいた方がいいと思うんです。

もう一つは鰹節の製造。既にフランスのブルターニュで鰹節作りを始めました。ヨーロッパで鰹節の知名度を上げるために必要な大きな試みかなと思いますが。

中　フランスでなぜ鰹節工場を作っているかって言うと、ご存知のようにＥＵには厳しい規制があって鰹節をそのまま輸出できない。燻したときに付着する物質が特に厳しい。だから、ちゃんとクリアするものを現地で作るってことなんです。いろんなルールに対して「もう作らない・出さない」ではなくて、現地のルールに従って勝負をするのは素晴らしいと思っています。その一方で、日本のモノをちゃんと輸出できるよう手を尽くすのも大事かなあと思います。

原　香りの点ではどうでしょうか。この頃、芋焼酎もフルーティーな香りにするという試みがなされていて、これも外国のマーケットを目指した取り組みだと思います。私は鰹節も焼酎も香りが大事な食品だと思います。特に削り節の風味がいいですよね。

中　和食では、出汁を飲む時にちょっと燻製の香りが鼻に抜けたりってところを良しとします。鰹節職人はそこに情熱を注いで燻製の補填をするんです。ただ、日本人の良しとするモノを全面的に打ち出すのも大事ですが、一方で、相手の国がそれを良しとするかどうかはまた別の問題かなと思っています。規制の方が大事な場合には、それに合わせた商品を開発する選択肢もあるかなと思って、そのへんのバランスが大事だろうと見ています。

原　シンガポールの空港にもたくさん日本の伝統的な食品が並んでいますね。全農なんかもずいぶん販売に取り組んでらっしゃると思いますけども、次のマーケットは台湾じゃないかと思います。

中　台湾は薄味なんですね。出汁を取って旨みで勝負をするという点に関して、台湾は世界のトップレベル。日本との親和性が非常に高いです。日本の文化を知ってらっしゃる方も多くて。「篤姫」とかも台湾のテレビで流れているそうです。理解がすごく高いなと思って。食文化を発信する相手として凄くいい相手でしょうね。

原　「篤姫」の吹替版を作ったのは台湾だけじゃなかったかな。でも、世界を相手にやるということは本当に大変だと思います。苦労しながら市場を開拓していくその精神はね、枕崎という町の持っているＤＮＡにありそうですね。

中　港町っていうのは世界とつながってますので、外国人が来てもあまり物怖じしないとか、いろんな文化を積極的に吸収しようとか、そういう気風は凄くあると思いますね。

原　インドネシアのカリマンタンまで行って鰹

を獲ってきた先人がいらっしゃるでしょう。原耕さん、彼の銅像が港にありますね。それから黒豚を戦争から守った園田兵助さん。食に関する偉人が二人も地元にいらっしゃる。園田さんの銅像は園田病院にありますね。中原さんも食の偉人の後継者になってくださいね。

原　小園さんお待たせしました。先ほどちょっと伺ったのですが、「世界ファム」に日本代表として世界の観光地を診断に行かれたとか。世界を相手にしながら、もう一方では、南大隅町でも活躍されて凄いですね。小園さんの提案や企画で、若い人が活躍して町が変わりつつあるなと感じました。ぜひご自身のキャリア、どんなことやってらっしゃるかを教えてください。

小　小園絢子と申します。よろしくお願いします。私はアローサインズという会社で代表をやっております。元々は東京都庁に勤務していました。インバウンドという言葉自体が聞きなれない頃で、旅行会社ですらインバウンド担当がまだ窓際族の部署みたいな感じの時代に「海外から旅行者をどうやって連れてくるか」ってことにずっと携わっていました。そこから観光の仕事にはまりまして、九割の客がリピーターになるっていう「東京ディズニーリゾート」を運営するオリエンタルランドという会社に入って、ブランディングとコンテンツ戦略っていう部門に携わってきました。そこから独立して今があるというところです。

原　アローサインズのアローというのは矢ですよね。

小　はい、そうです。観光地でよく見かける矢羽のことで、矢の付いた行き先案内の意味です。いろんな場所に人が移動するときに、その指針となるような情報発信やコンテンツを作る基地としての機能を自分の会社に担いたいなと思って、この名前を付けました。

原　東京ディズニーが日本に来たのはいつでしたっけ。

小　ランドのオープンが三九年前ですかね。だいたい私と同い年くらいですね。

原　面白いですね。東京ディズニーの申し子ですね。

小　そうですね、東京ディズニーリゾートは、やっぱり人の引き付け方が凄くて、世の流れがもの凄く速い流れで変わってもずっと人を引き付け続けて止まない。そういうコンテンツの作り方、新しい発信の仕方、見せ方をどんどん変えていく勇気や工夫を学んできました。そういったノウハウを活かして、いろいろな観光事業に携わっている皆さんの手伝いができたらと思っています。

中　キャストの動きとかよく研究されていますよね。私も指宿枕崎線の車内で出汁をふるまったりして、多少の観光に携わっているんですけど、そういう「アクション」「もてなし」「サービス」への対価をなかなか作り込めていません。そこはやっぱりディズニーさんは隙がない、と言うか凄い。で、かなり勉強して分析しています。

小　全てが計算されたビジネスなんですね。お客さんを楽しませたいというホスピタリティとかボランティアだけでやっているのではなくて、そこでちゃんと対価を取れる構造になっています。なので、入園するとき一万円位払って「ちょっと高いなあ」と思った人達も、中に入ると、もう全部忘れてしまうくらいの圧倒的体験・価値の提供が必要なんです。

中　鹿児島の伸びしろは、そういう体験に関わるビジネスかも知れませんね。何かを体験するときにお金を頂くってそんなに無いんですよ。そこをもっとしつこく攻めていって、対価をもらって当たり前な感じにする。そういう余地があると思います。

雄川の滝の入り口にあるカフェ

原　何か物を作って、対価のお金をもらうのは当たり前ですけどね。

「喋ってなんぼ」って本当に難しいんですよ。「タダじゃないのか」と言われます。これをビジネスにするのが大変。でも、これからは体験型・学習型の観光がまちづくりと一体となっていかないとね。

小　南大隅町で三年間、観光アドバイザーをしました。町長から「観光客が来てるのに、お金も落ちないし観光が産業になっていない。どうにかしてくれないか」っていう相談を受けたんです。当時は、良くも悪くもいろいろなもの・ことが町の中で留まって、小っちゃくまとまってるなあという印象でした。でも、例えば佐多岬なんかもう、何十年も前はハネムーンスポットで観光客であふれていましたが、今は当時より観光客がかなり減っています。時代のニーズの変化に対応できてないからなんですね。だけど、「今のままでいいじゃん」みたいなゆったりした印象でした。そこに、原口先生に火を付けて頂いて「雄川の滝」が「せごどん」でバーンと火が付きました。佐多岬でなくて「雄川の滝」に観光客が押し寄せて来たんです。

原　しゃれたお店ができたんでしょう。しかもクラフトビールを飲めるって聞きましたけど。

小　そうです。ちょうど「せごどん」が始まるタイミングだったんですよ。「どうやら、めちゃくちゃ人が来るらしい。でも、おもてなしをする場所が何も無い」と聞いて、三ヶ月でそこにカフェを作りました。カフェで働く人達を育成して、メニューを開発して、特に地元のモノにこだわってくれって話をして、地元の農家さんから全部仕入れられるように手配をしました。それから若い人がＳＮＳとかで勝手に拡散したくなるっていう、そういう見せ方・作りを目指したんです。事業を始めると広告に一番お金がかかったりするんです。広告費を一切かけない方法として、インスタグラマーなども含む、様々なメディアプレビューなどを仕掛けました。ビールは、昨年度からですが、カフェとは別で、クラフトビールの醸造所を立ち上げ、その地元のフルーツを使ったビールを、雄川の滝のカフェでも販売し、町の中で横連携を取っています。

原　二〇一八年の大河ドラマ「せごどん」ブームを思い出します。来年は「鹿児島国体」があります。佐賀県のご厚意で開催を譲って頂きました。若いアスリート達がたくさんいらっしゃいますので、何か鹿児島の良さを分かってい

ただく仕掛けが必要な気がしますね。

小　作ったモノをただ売るだけではなくて、その背後にあるストーリーだったり付加価値だったりが大事でしょうね。直接に体感できるモノと、そのモノの周辺、その後もちゃんと対価になる仕組み作りを大事にしたいと思います。

例えばディズニーリゾートだと、あるアトラクション一つに対して、二〇〇ページのバックストーリーがあるんですよ。だから、その一つのコンテンツの持っているストーリーをどうやってお客さんに五感で感じて貰うか、良しと受け止めて頂いて、口コミで広げて貰うかって工夫する。そこで初めて、一つのコンテンツに仕上がるんです。若い人って裏側のストーリーとか時代背景とかどういう物でできているのかとか、そういう付加価値の部分も含めて発信する力がある。そこからもっともっと鹿児島のもつコンテンツの魅力が広がっていくといいなって感じますね。せっかくのチャンスですから。

原　確かにね。南大隅町にはイギリス人が作った佐多岬灯台もあるし、キダカ（ウツボ）もいるし、ヘソミカンやタンカンや辺塚ダイダイもあるし、語り出したらきりがないですね。「唐人町」という中国の商人達の居住地もあった所ですから、決して田舎ではない。南を向いたときに、ここは東南アジアと奄美と沖縄を繋ぐ所、様々な可能性が繋がっていくゴールデンライン。そこに、様々な商品開発・多くのストーリー作り・歴史の見直し・振り返れば未来が見えるような取り組みをしたいですね。鹿児島県文化協会も、何かお手伝いができるんじゃないかなという気がしてきました。この特集を組む意味も、そこにあるんじゃないかなと思いますね。

和食の文化と鹿児島の関わりについて言うと、内外の料理人達が注目しているのは、鹿児島は食材が豊富だという点らしいですね。だけど食材をまだ活かしきれてないとも言っています。そういう点での可能性と、これから海外に向ってどういう道が開けるか。中原さんのビジネス戦略はどうですか。

中　私が鹿児島の可能性を語るときに話題にするのがフランスのボルドー。有名なワインの生産地です。人口は鹿児島よりちょっと多い位ですかね。ボルドーにはワイナリー（ワイン畑を持ってる工場）が一〇〇ほどあって、この一〇〇って数字も鹿児島の焼酎蔵の数に似ています。指宿と枕崎の鰹節工場も六〇ぐらいあるので、なんか鹿児島みたいな感じです。ボルドーにはワインの博物館があって、ワインの歴史とかを学ぶだけじゃなくて、周りにある蔵のかなりのワインをテイスティングできるんです。気に入ったらワイナリーまで案内するデスクもあるんです。いきなりワイン畑に行くとか（いきなり枕崎に行くとか）初めて来た人達にはハードルが高いかなと思うんです。鹿児島にも焼酎・黒酢・豚などが見わたせる、ボルドーの博物館みたいなレベルの場所が欲しいんですけど、無いですよね。

枕崎だとこう、見た目にもキラキラした空と海とあって、工場は煙を出してて、なんか作ってる音が聞こえるし、香りがもう枕崎は燻した香りで充満したりとか、それを五感で味わう。体験もいろいろできる。見るもの触るもの全てが産地のパワーなんですね。そういう「産地ならでは」の体験がいろんなタイミングでできるように条件整備をいろいろな産地に作っていく。築地とか京都では真似のできない、その、まさに作ってる現場を見せるっていうのは、産地でしかできないことです。だから、その産地の整備を考える。と同時に、鹿児島市にハブ的な機能を備えた博物館的な施設があると、凄くポテンシャルが上がるんじゃないかなと思いますね。

原　今、もう一〇年余りになりますかね。酒造組合の寄付もあって鹿児島大学に焼酎講座が生まれました。焼酎ソムリエの養成講座もできて、新潟のお酒・山梨のワイン・鹿児島の焼酎という大学間の研究連携もしています。だから、ボルドーの博物館のようなものができる機運は育っていますね。そういう方向を県の方でも支援してくれています。世界を旅していて時間がないときは、やっぱり市場、マーケットに行きますよ。それから博物館。ヨーロッパの博物館は充実していますよね。

小　博物館って資料が凄いですよね。二日間でも足りないぐらい見どころが多い。ヨーロッパは歴史の深いところですね。知ってからその場所に行くのと知らないで行くのとで、随分見え方が変わってくるので、さっき中原さんがおっしゃってたボルドーの博物館みたいな所があると鹿児島の焼酎の見え方も全然違いますよね。

原　シャンパンも世界文化遺産になりました。ブドウの収穫時期まで、シャンパーニュ委員会が決めています。僕は芋焼酎を持って大島紬を着てシャンパーニュ委員会へ表敬訪問したら大歓迎されました。芋焼酎とか大島紬とか地方の特色あるものに対して、フランスという国は非常に高く評価してくれますね。日本はまだまだ地方の特産物に対する評価が足りない気がします。

中　アメリカのカリフォルニアにナパバレーってワイン産地がありますけど、ワイン畑の横を走りながらワインを飲める観光列車が走っています。鹿児島も肥薩おれんじ鉄道っていう食堂メインの観光列車が走ってますけど、やっぱり沿線とかにお茶畑とか芋畑とかあったらいいなと思いますね。鉄道とか乗り物の中でゆったり景色を味わいつつ料理を楽しめるって、ポテンシャルが凄く高い。ですけど、それって沿線の景色とかもてなしとかのサービスが全部成り立ってないと、ただ殺風景の中を走っているだけになっちゃう。

　ローカル線は危機に瀕していますけど、まだまだ凄い可能性を持っているんじゃないかなと思います。ワイン列車とか焼酎列車とか、その産地の横を通るってことがものすごい説得力があるんです。ストーリーの一部になるんです。やっぱり車窓がですね・・・。

原　開聞岳が見えて、でかい焼酎の蒸留酒製造工場が見える、沿線には焼酎の原料、カライモ畑がずうっと続いていますね。

中　駅のすぐ隣に醸造所があって焼酎の蔵が沿線沿いにある。

原　なんかアメリカ中西部のでっかいサイロみたいなのが、突然バーンと現れるんですよね。オレンジ鉄道、カライモ鉄道、茶畑鉄道もいいな。ローカル線にストーリーと食べ物と特産物と絡めて演出するということがまだまだ足りないのですね。中原さんが鉄道と組んでらっしゃる理由がよく分かりました。

　対馬は日本と朝鮮の間にあって、様々な難しい外交問題を処理しながら今に生き続けてきた。対立しているにも関わらず国交を繋ぎ止めてきた。その歴史で生まれた一つの悲劇を舞台で見る機会がありました。鹿児島でも歴史を取材した高校生のミュージカルとか各地で取り組まれています。そういった若い方々のアイデアも素材になるんじゃないかな。

　大河ドラマ「鎌倉殿の一三人」に元寇の時代が描かれます。モンゴル襲来ですね。国交が無いのに、実は元の時代って僧侶や商人の往来が多かった。国が対立しても、民間の交流は逆に盛んな場合もあるのです。そういうときの共通言語こそ「文化」であると感じますね。世界の将来の安定のために大きな役割を果たすと思い

ます。

四季の変化・地理的な多様性・年中行事・人生儀礼などと関わった「食」だということが世界遺産登録の評価基準だったようです。その時々の場所で風味も違うし、そこに行って体験しなければ本物は分かんないって、そういう体験教育が必要じゃないかな。そういう意味でもやっぱりあれ、鰹節と昆布。これが薩摩のドル箱商品だった。あの先見性は、まさに「凄い」の一言です。

我々は今、様々なコミュニケーションの手段を持っています。過疎とか高齢化とか少子化とか条件の不利があっても、ツールの使い方・やりようによっては、凄いプラスにすることもできるんです。

どれだけ前向きな未来像を描けるかということにかかってきそうですね。最後に、将来の展望を聞かせてください。

中　枕崎も南大隅も九州の一番端っこ、日本の端っこ、鹿児島の端っこです。けれども、先生のおっしゃる通り、文化の入り口というか、あの海はそっから世界に伸びているっていう特別な位置なんですね。こういう端っこって日本で何カ所もあるわけじゃないので、凄く使えそうだなと、ストーリーを作る上でね、そう思います。

鰹節に関しては良い意味で外貨を稼ぐ、鹿児島が豊かになるための資源の一つかなと思っています。世界中にどんどん売っていきたい気持ちと同時にですね、鰹節がなぜ生まれたのかとか、食文化の中でどういう使われ方をすべきかとか、そういったことに産地としての誇りを持っていきたいんです。そういうことも大事だなって。外貨を稼ぐ面と心の豊かさの両面があって、本当の豊かさだなと思います。そういう目標に対して何ができるかって、いちいち立ち止まって、考えて、動いていきたいなと思います。それと、健康的な側面からも鹿児島の食材の可能性を感じています。

小　お二人の話を聞いて凄く勉強になりました。私はと言うと、それをどう発信していくかっていうところのプロなので、先ほどの、五感で楽しむ鉄道って可能性があるなと思いながら聞いていたところです。「五感で楽しむ観光コンテンツ」っていうのを一つキーワードにして、もう一つまだちょっともの足りないのがあるんです。鹿児島はまじめな県民性だからでしょうけど、エンターテイメント性って言うか、楽しく見せる、凄い印象に残る、記憶に残るっていう演出の要素が弱いかなって思っています。枕崎であったら、うんと五感で感じて、しかも印象に残る楽しみ方とワクワクするように気持ちをあげていく楽しみ方、その両面でお出汁を楽しんで貰いたい。お出汁の知識をちょこっと知って「ふんふん」でなくて、「美味しいね、楽しいね、こんなに良かったよ」って他の人に話したくなるようにしたいんです。お客さんに地元の方々が、「これは、こんなに凄くてね」って語って貰えるようになってほしい。鹿児島の食材はもう既に、無限の可能性がありますから、これからはその先の部分の楽しませ方ですね。それが私自身の希望、将来的な展望です。

原　健康で長生きで楽しんでいる。若い人と一緒にいると活気を貰える。海がある山がある、こんなに天然自然の舞台がある。素晴らしい遺産をどう活かしていくか。一人一人が取り組んでいくということですね。食と観光、そして持続可能なまち作り、これらを一体とした将来像を築いていかないとなあ。それと、これこれ、ビールですよ。今日は鰹せんべいと地ビールで夜を過ごします。お忙しい中、貴重な話を聞かせて頂いてありがとうございました。

中原晋司（なかはらしんじ）さん

中原水産株式会社　代表取締役
かつお節生産量日本一の鹿児島県枕崎市生まれ。2008 年に家業である中原水産㈱に入社。2011 年に新ブランド「かつ市（かついち）」を立ち上げ、長期熟成のかつお節を練り込んだ「かつおせんべい」の販売を開始する。また、「出汁男（だしおとこ）」「Mr. DASHI（ミスターダシ）」として枕崎や日本全国・世界各地でかつおだしの引き方教室を開催し、鹿児島の民間企業と「出汁の王国・鹿児島プロジェクト」を立ち上げるなど、「おだし」による地域活性化に注力している。

小園絢子（こぞのあやこ）さん

1982 年鹿児島市生まれ。鶴丸高校卒業後、東京のお茶の水女子大学へ進学。卒業後は東京都庁で主に観光分野でインバウンドのシティプロモーション等を担当。その後、東京ディズニーリゾートを経営するオリエンタルランドへ転職し、ディズニーキャストのブランディングおよび、経営戦略に携わる。2017 年に独立し、自治体や企業からの各種観光プロモーション支援および、6 次産業化を含む観光コンテンツ立ち上げを実施。鹿児島県では、南大隅町の観光プロデュース等を請け負い、南大隅町初の地ビール開発や水産加工場・商品の立ち上げ等を行う。

天文館文化通り
ムーンライト
ママ 小村順子
鹿児島市千日町７－16（安廣ビル１F）
TEL（099）224-4680
携帯 090-2710-0003

日本酒
月の灯り
鹿児島市東千石町 6-3
携帯 090-7580-0274

郷土芸能や伝統行事など伝統文化の保存継承を

広瀬道化踊り
大穴持神社の六月灯で（霧島市）

奄美民謡
公民館講座合同閉講式で（前年度瀬戸内町）

高城町太鼓踊り
高城神社奉納：前年度（薩摩川内市）

兵児踊り
風本神社で（過年度西之表市）

奄美六調太鼓
奄美市市民交流センターで（奄美市）

掲載の郷土芸能等は，令和３年度の助成団体です

田之神舞の面
飯倉神社拝殿で（南九州市）

伝統文化の保存・継承に係る助成事業

1　目的
県内の郷土芸能や伝統行事など伝統文化の担い手の育成・確保に取り組む活動に，助成を行うことで，貴重な文化遺産を保存・継承し，地域の文化振興に資することを目的としています。

2　業務の委託
公益財団法人鹿児島県文化振興財団の委託で鹿児島県文化協会が実施しています。

3　助成対象団体（次に掲げる全てに適合する団体が対象です。）
・県内に住所または活動の拠点を有する団体
・郷土芸能や伝統行事など伝統文化のうち消滅のおそれのある団体
・郷土芸能や伝統行事など伝統文化の担い手の育成・確保に取り組む団体
・国及び地方公共団体やこれに準ずる団体，営利団体，政治団体，宗教団体，並びに国及び県指定文化財は対象外です。

4　助成対象経費
・講習会・成果発表に係る経費
・衣装・道具の購入及び修理に係る経費
・その他担い手の育成・確保のための活動に要する経費

5　助成金の額
１団体当たり１０万円が上限で，助成総額は予算の範囲内です。

6　助成金交付申請書提出先，問合せ
提出先：各市町村を経由し県文化協会へ　　問合せ：各市町村文化行政担当課，県文化協会

加盟団体（市町村文化協会）

- 鹿児島市芸術文化協会
- 吉田地域文化協会
- 郡山地域文化協会
- 三島村文化協会
- 十島村文化協会
- いちき串木野市文化協会
- 東市来地域文化協会
- 伊集院地域文化協会
- 日吉地域文化協会
- 吹上地域文化協会
- 指宿市文化協会
- 南九州市文化協会
- 枕崎市文化協会
- 南さつま市加世田文化協会
- 南さつま市笠沙文化協会
- 南さつま市坊津文化協会
- 南さつま市金峰文化協会
- 薩摩川内市文化協会
- さつま町文化協会
- 阿久根市文化協会
- 出水市文化協会
- 長島町文化協会
- 伊佐市文化協会
- 霧島市文化協会
- 姶良市文化協会
- 湧水町文化協会
- 曽於市文化協会
- 志布志市文化協会
- 大崎町文化協会
- 垂水市文化協会
- 鹿屋市文化協会
- 鹿屋市輝北町文化協会
- 鹿屋市吾平町文化協会
- 鹿屋市串良町文化協会
- 東串良町文化協会
- 肝付町文化協会
- 錦江町文化協会
- 南大隅町文化協会
- 西之表市文化協会
- 中種子町文化協会
- 南種子町文化協会
- 屋久島町文化協会
- 奄美市文化協会
- 大和村文化協会
- 宇検村文化協会
- 瀬戸内町文化協会
- 龍郷町文化協会
- 喜界町文化協会
- 徳之島町文化協会
- 天城町文化協会
- 伊仙町文化協会
- 和泊町文化協会
- 知名町文化協会
- 与論町文化協会会

老人保健施設
ラポール吉井　デイケア
通所リハビリテーション
365日年中無休（朝食から夕食まで利用できます）

・マシントレーニング（パワーリハビリ）による自立支援リハビリ
（平成6年より開始）
・日・祝日・お盆・年末年始もご利用できます
（行事食・おせち料理が召し上がれます）
・短時間デイケア（2時間リハビリのみ）も行っています。

〒897-0001　南さつま市加世田
村原1丁目10番10号
（鹿児島トヨペット加世田店うら）
電話 0993-53-8888　FAX0993-53-8788
rapport@po4.synapse.ne.jp
担当：畠野まで

加盟団体（文化団体）

- 鹿児島交響楽団
- 鹿児島オペラ協会
- 鹿児島県吹奏楽連盟
- 鹿児島県合唱連盟
- 鹿児島県おかあさんコーラス連盟
- 鹿児島県箏曲会
- 生田流箏曲綵音乃会
- 鹿児島県尺八連盟
- 錦翔流大正琴
- 音楽舘ギャバン
- ゴッタン成音会
- Kagoshimaカンツォーネ協会
- The Songbird of Gospel（ソングバード）
- 鹿児島県書道会
- 鹿児島県美術協会
- 日韓交流美術展実行委員会
- 岡田茂吉美術財団鹿児島支部
- 鹿児島県詩人協会
- 鹿児島県歌人協会
- 鹿児島県俳人協会
- 天秤宮社
- かごしま文芸研
- 鹿児島市民劇場
- 鹿児島県子ども劇場協議会
- ブブ
- 鹿児島謡曲連合会
- 劇団「夢飛行プロジェクト」
- 鹿児島文化交流協議会
- 鹿児島県華道連合会
- (一社)表千家同門会鹿児島県支部
- (一社)裏千家淡交会鹿児島支部
- 前結び宗家きの和装学苑
- 詩吟朗詠錦城会鹿児島県本部
- 鹿児島県詩吟剣舞道連合会
- 田の神を守る会
- 郷土芸能中之町鉦踊保存会

加盟団体随時募集中

賛助会員

（令和４年３月５日現在）

ご支援ありがとうございます。

青野　のぞみ
池田　昭代
池畑　憲一
上山　貞茂
金子　真紀子
川原　健司
川村　美智子
河野　正行
最勝寺　良寛
坂中　慈子
酒匂　卓郎
迫口　幹子（ほか5名）
島本　保子
下鶴　隆央
城下　久美
園田　豊
平　ゆかり
田畑　浩一郎
辻　三男
鶴丸　明人
富山　定子
中村　耕治
成尾　信春
錦　京子
二之宮　信代
野間　珠弥
平島　義仁
藤崎　剛
藤田　はつほ
古市　裕美
北郷　萌祥
前原　尉
松里　保廣
水溜　利江子
宮之原　加代子
宮元　利典
本村　錦香
本村　ヒロ子（2口）
森田　まち子
森山　陽子
柳　佐知
柳　誠子
山元　黎子
吉井　浩一
吉留　厚宏

鹿児島筑紫会
詩吟朗詠錦城会　鹿児島県本部
特定非営利法人　JA☆TSUMA
野邊皮膚科病院
引坂ピアノ教室
日高千代子バレエ教室
萌桜会
マナーハウス　島津重富荘
水間流白藤会

※　順不同、敬称略

賛助会員の募集

当協会では、鹿児島県の文化振興並びに文化活動を支援していただく団体や個人の賛助会員を募集しています。
県の文化活動の発展のため、継続的なご支援をよろしくお願いいたします。

団体　1口　５０００円～/年　　個人　1口　３０００円～/年

賛助会員の特典

1　機関誌「文化かごしま」の謹呈（年2回発行）
2　機関誌「文化かごしま」及び県民文化フェスタのパンフレット等へのご氏名の掲載
3　県文化協会主催行事へのご招待

事務局までお気軽にお問合せください。

外科・内科・消化器科・肛門科・小児科・小児外科
医療法人 上原クリニック

診療時間	月	火	水	木	金	土	日・祝
8:30 ～ 12:30	●	●	●	●	●	●	
14:30 ～ 18:00	●	●	●	●	●	●	

☎(099)275－0010　〒891-0104 鹿児島市山田町221-1

グループ施設
● グループホーム あかね
● 居宅介護支援事業所 よいやんせ
● 上原クリニック通所リハビリテーション
● 上原クリニック訪問リハビリテーション
● 介護付有料老人ホーム 介護ハウス悠
● 特別養護老人ホーム ふれあいの街ねむの里
● デイサービスセンター さくら草

編集後記

広報部　河野　洋子

新型コロナウイルス感染症の爆発的な増加に伴い、感染防止や、濃厚接触者などと言った情報に一喜一憂し、対応に迫られる日々をお過ごしの事と思います。

前年度に引き続き、文化活動の自粛や中止、見直しが余儀なくされてしまいました。コロナ禍での文化活動を一生懸命頑張っている姿を、沢山寄せて頂き嬉しく思います。

今号も、世界に誇る鹿児島の伝統文化と食文化を紹介させて頂きました。

西郷隆文さんには、『薩摩焼』の歴史など盛りだくさんのお話をお伺いしました。魅力あるお人柄がそこここに感じられるインタビューになりました。

食文化では、中原普司さんに、鰹節の新ブランドの立ち上げやそれにまつわる知識をお聞きしました。南大隅町の観光プロデュースをしておられた小園絢子さんには、地ビールや、水産加工商品の開発についてお話し頂きました。心豊かに夢を持ち元気の出る話に感動いたしました。一二三号の作成にあたり、多くの方々からご賛同とご支援を賜り、厚く感謝申し上げます。有難うございました。

広報部

林　竜一郎（かごしま文芸研）
初音家政鵬翔（舞踊劇団ブブ主宰）
加治木　教允（郡山地域文化協会）
河野　洋子（錦江町文化協会）
野邊　美代香（鹿児島連合華道会）
福園　力（鹿屋市文化協会）

三役会の様子

HP

Email
kabunkyou@yahoo.co.jp
ka-bunkyou@po.minc.ne.jp

創業　明治３０年　（お弁当仕出し）

株式会社 鶴鳴館

鶴家

お弁当パンフレットご希望の方は郵送いたします。
お電話お待ちしています。　電話　099-294-2500

写真は懐石弁当 3,500円

医療法人 野辺ひふ科クリニック

診療時間		
曜日	午前	午後
月・火・水・金	9:00~12:30	14:00~17:30
木・土	9:00~12:30	休　診

休診日／日・祝日

〒896-0026
いちき串木野市昭和通 34 番地
TEL・FAX
0996-33-0250